

国民教育改革会議の審議を注目しよう(3)自ら考え、計画し、実行するボランタリー活動の時間を	1
スタディノートの上手な使い方(後編)	3
初の試み - 情報教育長期研修講座 -	5
幼児といっしょにたのしく英語を	6
一人一人がめあてをもって生き生きと活動するためのマット運動の工夫	7

国民教育改革会議の審議を注目しよう(3) 自ら考え、計画し、実行するボランタリー活動の時間を 中山和彦

自発的な奉仕と強制的な奉仕

国民教育改革会議の中間答申では「小・中学校では2週間、高等学校では1か月間、共同生活などによる奉仕活動を行う」と記されている。これに対し、公聴会などでは「奉仕を義務化する」、「奉仕は本来ボランタリーなもので、強制するのはおかしい」というような奉仕の性格についての指摘が多くあった。

しかし、「奉仕」という言葉は、「社会・国家・君主・公共、または他人などのために尽くすこと」(日本語大辞典(講談社;1990))で、他のためにとことんまでやることを示しており、自分の意思として行うか、他からの強制によってやるかには関係ないのである。したがって、奉仕には「自発的な奉仕」と「強制的な奉仕」とがありうる。前者がボランタリーな活動であり、後者の、学校によって課されてどうしてもやらなければならない奉仕は、強制的な奉仕なのである。

この点について、文芸春秋(2000年10月号)に掲載された国民教育改革会議委員会委員5名による座談会「子どもたちは『現世』を知らない」の中で、「『奉仕』という言葉は新聞などでも議論を呼び、一部では批判も出たようですが...」という問い掛けに対し曾野綾子氏は、「批判の多くは、奉仕活動という言葉で、ボランティアを義務化、強制するのはけしからんという論調ですね。」

「まず私は奉仕活動とボランティアはまったく別物と考えています。ボランティアというのは自発的コミットメントにあたる。誰にも強制されなくとも、

究極には命まで賭けてコミットするのがボランティアでしょう。それに対して、奉仕はもっと限定的なものです。国家から義務教育とか国民年金を受け取る反対給付として、義務としての奉仕活動を行なうべきだと私は考えているんです。権利には義務が伴う。誰もがみんなのために為さなければならないことを為す。そのことを教えるためにも、奉仕活動は義務であるべきだと考えています。教育は、必ず強制の要素を含むものです。だから、奉仕活動を強制したからいけない、という批判は成り立たない。」

「そこで『小学校と中学校では2週間、高校では1か月間を奉仕活動の期間として適用する』とし農作業や森林の整備、高齢者の介護などに共同生活をしながら従事する。また、できるだけ早い将来、18歳をめぐりに満1年間を奉仕期間として義務付ける、と提言したのです。」と述べている。

その後の話して浅利慶太委員(劇団四季代表)は、「18歳で1年間の奉仕活動という曾根さんの案は、非常に衝撃的な提案だと思います。しかし、それに対して、現実的に無理じゃないか、という議論もかなり出ました。確かに現実にはなかなか大変だとは思いますが、しかし、そう言っていては何も始まらない。とにかく突破口を見つけることが大切なんです。」

少なくとも、小中学校で2週間、高校で1か月の奉仕活動については、現在の文部省の管轄で実行できる。文部省と妥協するようですが、できることから手をつけてきかないといけません。」と発言している。

義務的奉仕は実際に始まるのか？

以上の座談会での発言を私なりにまとめると、
* 初等・中等教育段階で課される奉仕は、義務であり、教育の一環として強制されるべきものである。
* この義務は、国民が国家から受ける義務教育、国民年金などの恩恵に対する反対給付である。
* 奉仕の義務化は、現在の文部省の管轄下で実現できる。
ということになる。

「教育には必ず強制の要素を含む…」という発言については、教育の現状を見た場合には、ある程度認めざるをえない。しかし、だから奉仕を義務化して、強制させることに問題がないという論法は、あまりにも飛躍が激しく、到底ついていけないものでない。子どもたちは、学校での勉強の一部分だからと言って、共同生活で強制奉仕をさせられるのを納得するであろうか。

しかも、国がしてくれる義務教育や国民年金に対して国民が払う代価としての強制奉仕という考えは、国民誰もが納得できないであろう。義務教育や国民年金というものは、近代国家においては、国が国民に対して為さなければならない責務であり、恩恵ではない。しかも、そのために費やされる経費は、国民が労働の報酬として得たものが税金という形で国家に吸収され、それが国民に還流されているものである。それに対する反対給付というようなことは、絶対あり得ないし、考えることもできない。

国民教育改革会議の委員たちは、教育の意義をどのように考えているのか、また、行政府の役割をどのように理解しているのか疑問に思う。これは、非常に大きな問題である。それは、18歳での1年間の労働奉仕は実現が困難であるから、奉仕の義務化は現実に行き届くところからやらせて、突破口を開けという言葉の中に明白に現れている。そこで突破口として狙っているのが学校教育のなかでの奉仕の義務化である。

「学校における奉仕の義務化」を実現させるためには、学習指導要領を改定して、その中に「奉仕の義務化」の項をいれるだけでよい。学校は学習指導要領に基づき教育活動を行なわなければならないので、「義務化された奉仕」を学校における教育活動として実施しなければならなくなる。文部大臣の諮問によって、中央教育審議会が教育課程を、学習指導要領は教育課程審議会で審議をする。その答申に基づいて、文部大臣の告示で定められる。告示であるので、文部大臣の権限内で自由に定められるが、審議会の答申を得てということで一応歯止めがかかっている。

しかし、国民教育改革会議の議論や、最近の政府の様子を見ていると、訳の判らぬ文部大臣が出てきて、国民教育改革会議の答申に記されているからと強引に学習指導要領改定をして、「奉仕の義務化」を実施す

るような事になりかねないと心配する。

心配というよりは、近い将来にそのようなことが実行され、極端に言うとも2002年から試験的に実施ということになってしまうのではないかと恐れている。

ボランティア活動の時間こそ必要

阪神大震災の後、日本でもボランティア活動が一般的に広く行なわれるようになり、ボランティアとして奉仕する人も次第に多くなってきた。ボランティア活動を奉仕活動と呼んでいることもあるが、奉仕には強制されたものもあり、ボランティア活動を表す適切な日本語がないため、英語のまま使われている。

そこでWebster Essential English Dictionaryでボランティアを見ると「自身の自由意思によってなされたことについていう。明らかな圧力や強制のないことを示し、選択が完全に自由であるという面を強調することもある。」と記されている。ボランティア活動と、国家が義務として子どもを動員して奉仕をさせることとは、全く異なるのである。

国民教育改革会議の中間答申には、奉仕活動の一例として高齢者介護が挙げられているが、この場合には、高齢者は一人の人間としてではなく、国家への奉仕活動をするための道具として存在することになる。強制された、いやいやながらの介護は、老人の人間性にどのような影響を及ぼすであろうか。また、そのことを通じ、子どもたちが老人をどのような眼でみるようになるであろうか、考えるだけで恐ろしい。

そのようなことになったら、強制的な奉仕活動は、人間性を育てるのではなく、人間性を失わせる、壊す方向に働くであろう。

子どもたちに、上から命令をして強制的な奉仕をさせた場合には失うものはあっても、得るものはない。今の子どもに持って欲しいのは、自分の人間性に基づいて、自分で何が出来るかを考え、計画をし、自らボランティア活動を行なう能力であり、実践である。そのためは、奉仕の時間として学校教育の中に設けようとしている時間を、真のボランティア活動の時間として活用することこそ望ましい。

(筑波大学名誉教授 / 21世紀教育研究所 所長)

この記事についてのご意見・ご感想をお寄せ下さい。
econews@green.ocn.ne.jp



「教育改革国民会議」ホームページ
<http://www.kantei.go.jp/jp/kyouiku/index.html>

スタディノートの上手な使い方 (後編)

余田 義彦



(前号のつづき)

次に6点目ですが、「ホームページ」についてです。ホームページでいろんな情報を取ってくるができますね。画面の絵をそのまま貼りつけたり、文章をカットまたはコピー&ペーストしたり。「このページにはこんな情報がありました」といって、そのまま貼りつけることができる。しかし、どうでしょう。これでは、そこにある情報をこっちに持ってきただけですよ。その子の頭の中で全然咀嚼されていません。こういった場合は、「一言でまとめるとこれは何のために持ってきたのか」とか、「何のためにこの情報を載せたのか」とか、「どこが重要なのか」とか、そういうことを自分の言葉で説明させることが大切ですね。あるいは「この情報ってホントなのかなあ」とか、「発信者は現地の さんなので正しいと思います」とかですね、そういうことを評価させるなど、いろんなことをやらないと学習は深まっていかないですね。

7点目は、目的に応じて「ノート」「電子メール」「掲示板」「データベース」を使いこなしましょう、ということです。データベースも、最初は敷居が高いかもしれませんが、使っていけば意外に簡単に使えますから、ぜひ躊躇せずに自信をもって使って下さい。

電子メール・電子掲示板

ちょっとした情報のやりとり
共同制作での情報のやりとり
インターネットでの情報のやりとり

データベース

特定の教科単元の学習で作成された
みんなのノートを長期的に残しておく
テーマをしぼってのやりとり
親情報、子情報

それから8点目。これはスタディノートに限りませんが、インターネットやコンピュータが入ってくることで、学校の教育というのを変えていかなければいけない、そういう時代になりつつあります。例えば、「先生」は「教える存在」で、「子供」というのは常に先生から「情報を受ける」常に「学ぶ存在」という発想は、もうそろそろ変えていく必要があると思います。

子供も教えることができます。「教える者は二度学ぶ」という言葉もありますが、子供のできる範囲で、自分の言葉で友達に一生懸命説明することで、その子自身はもっと深く学んでいくことができますし、先生が全部教えなくても子供どうしの助け合いで学んでいく部分もかなりあります。スタディノートに限らず、ス

タディシリーズのソフトは、そういった子供同士の相互作用を学習活動に取り入れることを重視しているんです。

もちろん先生も教えます。子供も教わるし、先生も場合によっては教わることもあるかと思えます。いろいろな実践を残されている先生方もそうだと思うんです。実践を通していろんなことを学んでいる。「ともに学んでいく」という姿勢が、特に総合的な学習では必要だと思います。全部がわかってやっている、ということはなかなかありません。我々大学の人間も同じです。そういう時代なんですね。先生や教科書だけで情報というものを学ぶのではなく、いろんなもの、例えば新聞、電話、あるいはコンピュータ、ホームページ、また人からも直接学んでいく。実際に社会に出たら、みんなそういう学び方をしているわけです。そういうふうに発想を切り替えていくことが将来的に子供たちのためになるのです。

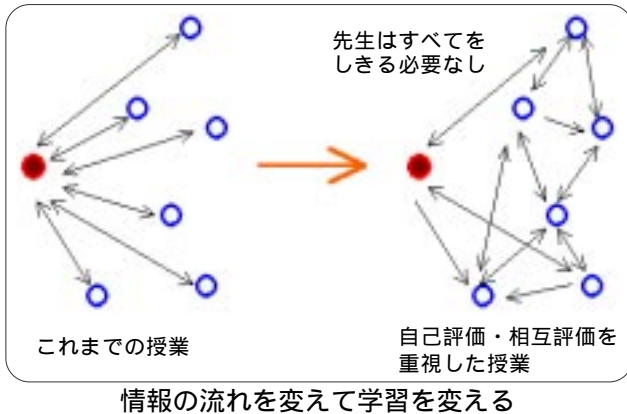
教え教わるという話をしましたけれども、評価についても同じようなことが言えます。先生が学習を評価することも大切ですが、子供たち自身も評価することが大切です。これは、新教育課程にも「自己評価をもっと重視しなさい」としっかり書かれています。というのも、生涯学習を考えてみますと、自分で目標を立てて、今自分はどこまでわかっていて、次何をしなければいけないのか、ということを考えながら学んでいく、ということが非常に重要になってくるのです。そういう力を子供の頃からきちっと身につけさせていく必要があるわけです。

ただし、子供にできる評価というのは限られていますから、先生の立場での評価も大切です。例えば掲示板やデータベースで子供たちが調べた情報を載せていますね。「お互いに評価しよう」と言いますと、みんな「絵が描いてあってわかりやすかったです」「くんの絵はきれいでわかりやすかったです」とか、そればかりになってしまう場合があります。「きちっと文章でわかりやすく説明している」とか、そういうことってなかなか書けなかったりしますね。そこで、子供たちが書いていない、あまり気にしていないような視点で「くんの説明はすごくよかった」とか、先生がポロツと言え、「ああ、そういう見方もあるのかな」といったふうに他の子供たちも学んでいくと思うんです。先生の評価の視点というのを他の子供たちも取り込んでいくでしょう。

9点目。これは十数年前の私自身の経験でもありますが、「情報の流れを変えていく」ということがかなり

スタディノートの上手な使い方(後編)

ポイントになるかと思えます。この は先生だと思っ
て下さい。 は生徒・児童です。



普通教室で先生が教えるときは、子供たちが全員先生のほうを向いていて、先生とのやりとり、たまに子供たち同士のやりとりもありますが、基本は先生との往ったり来たりです。レポートやノート指導などする場合も「はい。できたら先生のところに持って来なさい。先生のところへ持ってきて、先生がチェックして、先生が「ハイよくできました」と言って返す。はたで友達のやっている様子を見て、「あ、ああいうふうにやればいいのか」というように学ぶことはあるかもしれませんが、基本の流れは、先生との往ったり来たりですね。

同じことをコンピュータを使ってやろうとするとどうなるか。私がそれをやってしまったんです。学生からレポートをどーんと電子メールで送られます。コンピュータの画面で電子メールを読むのってけっこう大変なんですね。結局ぜんぶプリントアウトして、先生の余分な仕事が増えただけ。大変です。それに加えて、生徒の質問に全部答えていたら、口で言うなら簡単なこともキーボードでやるとすごく大変です。しかも、そのやりとりを他人は見えていません。Aくんに対してアドバイスしても、BくんもCくんもDくんもそれを見ていません。そうすると、BくんやCくんともう一度同じやりとりをしなくてはならないかもしれない。そうならないためにも、子供同士で、まずできたらお互いこれでいいのかをなっていることをチェックさせる。それが大切になってきます。

ちょっとした例を言いますと、富山県滑川市西部小学校の水橋先生の実践で「校長先生への手紙」というものがあります。スタディノートを使って電子メールで送るのですが、その前にお互い子供たちみんなで文章をチェックさせ合ってから、先生に送るんです。そうするとだいたい細かいチェックはもう終わっていて、本質のついたチェックだけを先生がすればいいということになります。そうすると先生も楽になりますし、子供たちにとっても楽になるというわけです。ただし、お互い口で評価し合うといってもピンときませんから、学習のめあてとして「こういうことはうまくできたかな」と

いうことをきちんとリストアップして、その視点でお互いに見ていく、ということが必要かと思えます。

最後ですが、インターネットをこれからもっと上手に活用していくことを考えましょう。先ほど言いましたように、教科書や先生だけが知識を持っているのではなくて、それ以外の外部の人の知識も上手に取り込んでいくようにしましょう。子供にとってみたら友達も先生も外部の人も「情報を得る存在」であり、自分の持っている情報を投げかけてみて、ホントかな？どうかかな？という評価をしてもらうこともできる。スタディノートを使うと、そういうことがお互い比較的簡単に、もっともっとやりとりできるようになります。

このための道具として、インターネット掲示板という道具があるわけですね。子供が外部に昼間のうちに投げかけておけば、夜、大人が子供に対する返事を書く、というように時間の壁を越えてやりとりできるようになっていくわけです。そうしたいろんな情報をもとにして、答えがわからないようなことも子供たちが追求していく、そういうことを学べるのが総合的な学習の重要なポイントじゃないかなと思います。

そのためにはちょっと視点を変えることですね。最終的に先生は、細かいアドバイスをしなくても全体像を見ていればいいわけです。どこでどうなっているかということをよく見ておいて、ここぞというところで指導していく。放っておけばいいという話ではありません。念のために言っておきますが。

以上あげたことがらのうちで、何点かでも注意してやっていただくと、スタディノートをさらに有効に活用できるんじゃないかと思えます。これでスタディノートの上手な使い方の話を終わらせていただきます。

インターネットから情報をとってくるのが学習？

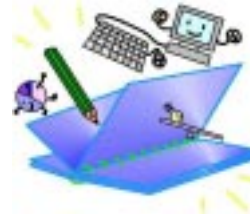
情報は吟味して受け入れるもの
仮説形成の手段と考える

情報を発信する経験を通して

インターネット上にある情報がどのようなものを理解し、それをどのように受け入れ活用していけばよいかを知る。

情報を発信している人はどのような人たちであり、どのような思いで情報を発信しているか知る。

(筑波女子大学助教授)



平成 12 年 8 月 7、8 日におこなわれた筑波女子大学ワークショップ「スタディノートを中心としたインターネット/校内ネット利用の授業展開」の中での、余田義彦先生の講演「スタディノートの上手な使い方」を一部紙面向きに編集して掲載させていただきました。

初の試み - 情報教育長期研修講座 -

沖縄県立教育センター情報処理教育課 安和 守光

1 情報教育長期研修講座とは

ミレニアムプロジェクト等に見られるように、教育の情報化によって、学校が変わり、授業が変わり、子どもが変わるといった指針が提言されました。つまり、高度情報通信社会に主体的に対応できる児童生徒を育成するという教育目標の実現のためには、それにふさわしい「新しい革袋」となるように、学校や教師、教育行政の変革が強く求められるようになりました。

沖縄県立教育センター情報処理教育課でも、毎年2000人程の教師が情報教育についての研修を受講しています。しかし、全教師を「指導できる」ようにするためには、従来のような研修形態に新たな方法を加えることが急務であると考え、今回の「情報教育長期研修講座」を設定しました。

この講座の特徴は、小・中学校において情報教育推進のリーダーとして教育事務所から推薦された者、または、コンピュータを活用した授業を推進するにあたり、校内研修のリーダーとして学校長が適任と考え、教育事務所から推薦された者を対象に、1カ月間、現場を離れ、本課で指導者養成のための講座を受講するということです。

実施に際しては、予算や実施方法等乗り越えなければならない様々な障壁がありましたが、沖縄県内6つの教育事務所から小・中学校それぞれ2名、合計24名の先生方が集まり、無事、講座をスタートさせることができました。

2 感動の連続がネットワークに

充実した講座内容

連日、様々な研修内容が設定されており、かなりハードな研修となりましたが、特に、今回の研修では、21世紀教育研究所のご支援をいただき素晴らしい内容の講座を開講することができました。



講演される中山和彦先生

10月6日には、中山和彦先生に無理をお願いして、午前中は24名の先生を対象にした「学校における環境教育」についての講義を、また午後には「総合的な学習の時間と情報教育」をテーマにした教育講演会を開催することができました。特に午後の講演会では、近隣の市町村から会場の収容人員の4倍を超える、たくさんの先生方が集まり、急遽、別室に会場を設置し中継を通して講演の様子を放映するなど大変な反響でした。

10月12日～13日はスタディノートを活用したワークショップを余田義彦先生と山野井一夫先生にお願いしました。ポートフォリオ評価についてやスタディノートを活用した授業実践、校内LANの敷設、ホームページの作成など中身の濃い講座となりました。

10月19日～20日の2日間はスタディライターを活用したマルチメディア教材の開発を21世紀教育研究所のスタッフの皆さんとシャープのご協力を得て、スタディコースの体験や教材開発の実際について懇切丁寧に指導していただきました。

受講者の感想

本日の中山先生のご講演は、日本の環境教育・情報教育を企画・立案して実践してこられた方のお話だけに説得力があり、心から納得を得ることができました。中山先生に心からお礼を申し上げます。

今回紹介していただいたスタディノートは、児童生徒のみならず、教師にとっても活用しやすいソフトであると思いました。データベース機能を使っただけの投票や、簡単に作れるデータベースなど、学校で使えるような機能がたくさんあり、ぜひ、他の先生や子どもたちと一緒に使ってみたくなりました。

実際にスタディコースを体験してみて、とても細かいケアがなされていることを実感しました。誤答に対する治療コースがきめ細かいので、いくらでも掘り下げて個々のレベルに応じた学習ができるところが素晴らしい。実際にフレームデータの作成を行ってみると、ひとつの教材が完成するまでには、気の遠くなるほどの時間と努力が必要だということがわかりました。しかし、完全習得学習ということを考えると、やはりスタディコースのような学習者の立場になって作成された質の高いCAIが最適な教材であり、機会があればひとつの教材を完成させてみたいと思った。

ヒューマンネットワークへ発展

感動はやがてそれを共有することで、新たなネットワークにつながり、今回受講した24名の先生方は、これから沖縄県が進める情報教育の中核として、互いのネットワークをより一層深

めながら活躍できることを実感しました。

特に、10月の研修会が終了したあとも、各地で、あるいは各学校で主体的に研修会を開催し、感動の輪がさらに広がっているとの報告が本課にたくさん届けられています。なかにはヒューマンネットワークを活用して、共同で研修会を開催しているという報告も届きます。ここに今回の研修会の大きな成果を見出すことができました。

最後に受講した先生の感想をひとつ添えて終わりたいと思います。

「この研修で学んだことをどのように学校現場で実践していくか、言葉や活字ではうまく言えないのですが、確実に自分の中でコンピュータや情報教育についての考え方が変わりました。学校に戻ってからこの経験を生かして、一生懸命頑張りたいと思います。」

【 情報教育長期研修講座 一ヶ月の日程表 】

研修日	日付	曜日	区分	講座名	主な内容
第1日	10月2日	月	午前 午後	開講式,オリエンテーション 講義:「情報教育」	研修の心構え等 センター施設案内 ねらい,情報活用能力・学習指導要領
第2日	10月3日	火	午前 午後	Windowsの基礎 インターネットの利用	Windows2000の基本操作 インターネットのしくみと操作
第3日	10月4日	水	午前 午後	電子メールの活用 インターネット情報収集	電子メールの機能と操作 教育関係サイトからの情報収集
第4日	10月5日	木	午前 午後	DTPの応用 DTPによる教材作成	Word2000を使った校務文書作成 " 教材作成
第5日	10月6日	金	午前 午後	講義「総合的な学習」 講義「これからの情報教育」	環境教育・インターネットの活用等 情報教育のねらいと展望について
第6日	10月10日	火	午前 午後	表計算の基礎 表計算の応用	Excel2000の基本操作 関数,グラフを中心に演習
第7日	10月11日	水	午前 午後	表計算の応用 講義「情報モラル」	調査集計表・統計処理・その他 モラル・著作権
第8日	10月12日	木	午前 午後	校内ネットを利用した授業 校内ネットを利用した授業	学校間共同学習の方法と実際 学校間共同学習の方法と実際
第9日	10月13日	金	午前 午後	校内ネットを利用した授業 校内ネットを利用した授業	学校間共同学習の方法と実際 学校間共同学習の方法と実際
第10日	10月16日	月	午前 午後	プレゼンテーションの活用 教材分析の手法	PowerPoint2000の基本操作と応用 コースウェアのしくみと作成方法
第11日	10月17日	火	午前 午後	デジタル画像処理の基礎 デジタル画像処理の応用	ノンリニア編集の演習 ノンリニア編集の演習
第12日	10月18日	水	午前 午後	Word2000を活用した教材作成 長研員(1年)ソフト紹介	ホームページリンク集の作成 ソフト作成の実際を学ぶ
第13日	10月19日	木	午前 午後	CAIの理論と評価法 マルチメディア教材の開発	学習指導の個別化を中心に マルチメディアを活用した教材開発
第14日	10月20日	金	午前 午後	マルチメディア教材の開発 マルチメディア教材の開発	マルチメディアを活用した教材開発 マルチメディアを活用した教材開発
第15日	10月23日	月	午前 午後	校内研修計画の進め方 校内研修計画作成演習	校内研修計画の立て方 校種別に校内研修計画を作成する
第16日	10月24日	火	午前 午後	教育ソフトの活用 教育ソフトの活用	ハイパーキューブを活用した教材作成 ハイパーキューブを活用した教材作成
第17日	10月25日	水	午前 午後	研修運営計画作成 研修運営計画作成	教材作成及び文献・資料より理論研修 教材作成及び文献・資料より理論研修
第18日	10月26日	木	午前 午後	研修運営計画作成 研修運営計画作成	教材作成及び文献・資料より理論研修 教材作成及び文献・資料より理論研修
第19日	10月27日	金	午前 午後	成果発表会の資料作成 成果発表会の資料作成	レポートの作成とプレゼンテーション プレゼンテーションの作成
第20日	10月30日	月	午前 午後	成果発表会の準備 研修成果の発表(小学校)	発表資料の準備 発表会を行う
第21日	10月31日	火	午前 午後	研修成果の発表(中学校) 資料整理	発表会を行う 閉講式 閉会行事 研修会で作成した教材・資料の整理



- 幼児といっしょにたのしく英語を -

東京家政学院筑波女子大学短期大学部情報処理科2年：中山ゼミ



私たちは、『幼児のための英語教育プログラム』をスタディライターを用いて作成しています。子どもたちに絵本感覚で英単語にふれてもらい、楽しく英語を覚えてもらうことが目的です。

たくさんの言葉に触れるであろう年齢として対象年齢を4歳児とし、コースを作成することにしました。作成にあたり、幼児の実態を知ることが必要であると考え、私たちは幼稚園で実際にテーブルコーダーを園児につけてもらい、子供たちが生活の中でどのような言葉を使っているのかを調べることにしました。

英語の正しい発音を耳で聴いて覚えてもらうために、

園児が実生活の中で使っていた言葉の一例
動物/うさぎ くま ひよこ あひる 七面鳥
ぶた ゴウ ねこ うし きんぎょ
色 /むらさき ピンク あおしろ みどり
きいろ

自分たちで発音を録音して音声をとり入れたり、より興

味を持ってもらうために、実際に動物園に行き自分たちでビデオ撮影して動画などもとり入れたりしました。スタディライターは、問題の試行回数を自由に変えられる点や、動画を簡単に載せられるといったことが、とても使いやすく便利でした。

その後私たちは、実際に試してもらおうと、近くの幼稚園にご協力を頂き、学園祭などに来てもらい教材に触れてもらいました。アンケートをとり、改善点も出てきたので、これからも手直しをして、よりよいコースウェア作りに励もうと思います。

作成した教材名：

くまちゃんとおそぼう
どうぶつをさがしにいこう
かおをおぼえよう



一人一人がめあてをもって生き生きと活動するためのマット運動の工夫

宮城県仙台市立太白小学校 高橋 洋充

はじめに

デジタルカメラ「マビカ(SONY)」のMPEGムービーとスタディノートを組み合わせて利用した実践を報告します。余田先生からデジタルポートフォリオのお話を伺い、チャンスがあればネットワークとデジタルの良さを生かしたデジタルポートフォリオ的な実践を試みたいと考えていました。そんな折り、本校の山中教諭にMPEGムービーをスタディノートで利用できることを伝えたところ、マット運動の指導に生かすアイデアが生まれてきました。

山中教諭は、以前からマット運動の指導にあたり、子供の技の分析を行い、個に応じた指導ができないものかと問題意識をもっていたそうです。ビデオカメラによる撮影は、機器の設営に時間がかかり同時に多くの子供が利用できないなどの問題点があり、授業で日常的に使用するのには難しいと考えていたところ、MPEGムービーを紹介され、実現可能な感触を得たということです。子供たちは日常的に学習の道具としてコンピュータを使用しており、特にスタディノートを使用するの学習には慣れ親しんでいることも、山中教諭がこのアイデアを実現する一助になったようです。

基本方針

私は情報教育担当のTTをしており、6年担任の山中教諭と指導の基本方針について話し合いました。その結果、マビカのMPEGムービーとスタディノートを使用して授業を実施するのは、「マット運動の学習において一人一人のめあて達成を目指した活動を支援するため」であることを確認しました。

指導の実際

1 MPEGムービーで撮影する前に、マット運動の練習をする。

MPEGムービーで自分の技を振り返るためには、マット運動の技についてある程度の知識が必要だと考えました。そのため、マット運動の指導には担任が模範演技を見せることや副読本を使用して理論的にも学習しながら練習をすすめました。

2 MPEGムービーを使って、マット運動の技を撮影する。

これまでマット運動の学習では、友達と教え合って活動するという手法を何度かやってきたそうですが、子供が互いに技を分析するには限界があったとのことでした。山中教諭にとっても数十人の子供たちの技を分析し、一人一人に適切な支援をすることは難しいと感じていたとのことでした。

マビカは記録メディアがFDのため、手軽にデータを転送することができますが、記録容量が小さいという特徴をもっています。そのため、子供たち全員の技を撮影できるようにFDを15枚ほど用意し、ラベルに通し番号をつけておきます。担任は撮影をしながら子供

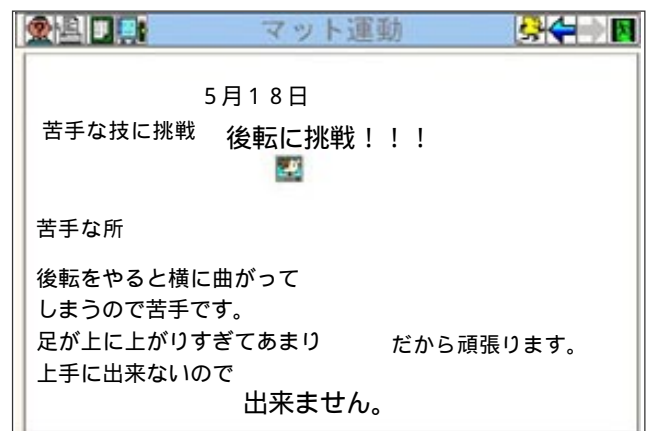
たちに自分の技が何番のFDに記録されたかを告げ、覚えておくように指示します。この番号はあとからスタディノートに自分の技を貼り付けるときに、MPEGデータが保存されているフォルダ名としました。

撮影は担任が行いますが、FDデータをスタディノートのみんなのフォルダにコピーするのは情報教育担当TTの私の仕事となります。FDは体育の授業終了直後にコンピュータ室の私に届けられます。私はそのデータをスタディノートで使用できるように「みんなのフォルダ」にコピーします。その時にFD番号に合わせたFD枚数分のフォルダを作成し、その中にコピーするようにします。このようにすることによって、子供たちは自分の技を撮影したMPEGムービーのデータをすぐに見つけ出すことができるようにしました。

3 スタディノートに、自分のMPEGムービーを貼り付ける。

スタディノートにMPEGムービーを貼り付けるのは、体育の授業が終了してから時間をおかないように配慮しました。子供たちが自分の技について新鮮な感覚を維持している間に振り返りの活動をさせたいと考えたからです。担任が一人でMPEGムービーのデータをコピーするのは時間的に難しいのですが、TTで取り組み、役割分担をすることにより可能になりました。

子供たちはスタディノートにMPEGムービーをすぐに貼り付けられるようになりました。貼り付けた後は繰り返し自分の技を見ていました。マット運動の技について解説してある副読本の内容を見ながら、自分の技についての反省点や改善点をスタディノートに記入していきました。原則として1ページに1つの技を貼り付けさせました。フォーマットを統一し、簡潔にまとめさせることも友だち同士で見合うには大切だと考えたからです。



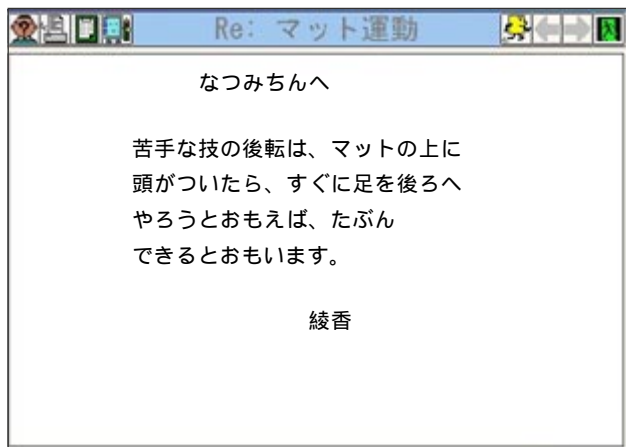
自分の技についての反省点や改善点をスタディノートに記入(画面中央の円印を外すとNさんが挑戦した「後転」の画像が映し出される。)

4 ノートをデータベースに登録し、お互いに見合い、アドバイスを子情報として登録する。

子供たちは、自分の技や友だちの技を何度も見ていました。子情報の中には、技術的な視点から担任も驚くような的確なアドバイスも多く見られましたが、視点が明

一人一人がめあてをもって生き生きと活動するためのマット運動の工夫

確でない内容も見られました。それでも、自分の技を見せ、喜んだり恥ずかしがっている子供たちを見ると、心の底からこの実践に取り組んで良かったと感じました。ノートにMPEGムービーを貼り付けることが活動の中心ではなく、じっくりと自分たちの技について見合う時間を確保することが重要だと感じました。



AさんがNさんのノートに子情報として登録した画面

山中教諭は子供一人一人の技を分析し、時間を見つけてはコンピュータ室を訪れて、細かなアドバイスを子情報として登録していました。まさに一人一人の子供にアドバイスをしたいがためにこの実践に取り組んだと言い切るだけあり、忙しい中にも時間を作って書き込んでいました。スタディノートがネットワーク対応であり、教室や職員室からでも子情報を登録することができる環境も、全員分のアドバイス登録することができた一助となったように思われます。

5 寄せられた子情報を参考にして、再度同じ技に挑戦し、MPEGムービーで撮影する。また、同時に新たな技にも挑戦する。

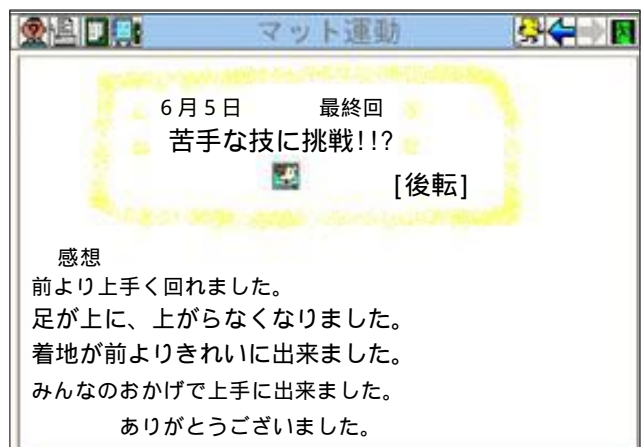
1 回目の自己評価では動きを大づかみにしかとらえることのできなかつた子供も、2 回目になるとより細かな体の使い方にまで目が行き届くようになってきました。その結果、子供の意欲も友達の励ましに支えられながら向上し、二度目の挑戦では着手や身のこなしなど技の完成度が高まってきました。学習を終えての感想にも、子供の技を克服したことに対する喜びの言葉が見られ、MPEGムービーとスタディノートを利用した学習の成果があったことを実感しました。

実践を終えて

今回のMPEGムービーとスタディノートの利用については、まだまだ改善の余地があると思われます。特に、親情報と子情報の登録の仕方や題名の付け方は、情報が増えていくことを考え、更に工夫の必要を感じています。しかし、山中教諭は「一度録画すれば、その後はいつでも自由に再生でき、子供が自分の技の向上を記録として保存できるというメリットを十分に実感することができたことは大きな収穫であった」と述べています。情報教育担当の立場からすれば、本校の教員がコンピュータを使った実践を効果的だと感じたことが一番の収穫のように思います。

今回は、マット運動という領域での活用でしたが、工夫次第で鉄棒運動や陸上競技表現など様々な場面で活用できる感触を得ることができました。この実践後、二学期には跳び箱運動で取り組みました。マット運動の実践と比べると時間のかけ方も半分程度で済み、教師にも子供たちにもMPEGムービーとスタディノートの活用が定着してきたように感じます。

山中教諭はノートコンピュータをマット運動の実践をした後に購入しました。コンピュータを利用した教育により積極的になったように感じます。この実践に刺激を受けた教員もいます。この実践がこれから、他の教員の持ち味や専門性を生かすきっかけになってくれればと願っています。



友だちや担任のアドバイスを受けて、再挑戦した映像を含めて作成したNさんの画面



ECOnews 郵送会員登録 年間随時 受付中

ECOnewsは、21世紀教育研究所のホームページをご覧になるか、または郵送で受け取ることができます。郵送会員には、年会費1000円で、年6回発行のECOnewsとECOnews教材CD-ROM、スタディシリーズ試用版CDなどを無償で配付いたします。

くわしくは、下記までご連絡ください。

注意 ECOnews教材CD-ROMは、希望者のみの配布となっています。申し込みをされる際は申込用紙に教材CD-ROM希望とお書きになるか、その旨を当研究所までお伝え下さい。

なんだかもうすっかり陳腐な言い回しとなってしまいましたが、20世紀最後のECOnewsをお届けいたします。間に合って本当によかった、ホッ！

来る21世紀は、教育を巡る状況もスタートから多事多難が予想されますが、子供たちとスタディの間で私たちですてきな未来を作って行きましょう。

新世紀もどうぞよろしく。

21世紀教育研究所

〒305-0045 茨城県つくば市梅園2-33-6

Tel ☎0298-50-3321 ☐ ☐ Fax ☐0298-50-3330

e-mail econews@green.ocn.ne.jp

URL <http://www.eri21-unet.ocn.ne.jp/>